

有島武郎研究

— 著作集第六輯『生れ出る悩み』をめぐって —

宮野光男

有島武郎著作集第六輯『生れ出る悩み』〔大7・9〕には、表題作「生れ生づる悩み」〔同・3〜7〕と、「石にひしがれた雑草」〔同・4〕の二作品が収録されている。

これまでに、この二つの作品は、執筆時期が重っており、しかも同じ著作集のなかに収められているものであるにもかかわらず、それぞれが深い関係にある作品として取り上げられてきたことは、かならずしも多くはなく、その内的な関連性のあり様についても、定説があるわけではない。

むしろ、内田満氏の指摘があるように、「石にひしがれた雑草」は、「或る女」との関連において取り上げられてきた作品である。△この作品は、さまざまな点で「生まれ出づる悩み」と対照的△であるにもかかわらず、あえて比較されずじまいだったのである。

そのような状況にあつて、小坂晋氏の、△「石にひしがれた雑草」は、いわば作者の精神的陰面といえる△作品であり、「生れ出づる悩み」は△有島の精神的陽面である△という関係における捉えかた

有島武郎研究 — 著作集第六輯『生れ出る悩み』をめぐって —

は、表現主体の内面性の、対照的な表現方法の問題として位置づけられているという意味で、著作集という、ひとつのまとまりのなかで読もうとする試みにとっては興味深い指摘である。

内田氏の論も、大筋からいうと、「石にひしがれた雑草」が、△「或る女」と結んでとらえることのできる、△二つの作品の近縁関係もしくは等質性を認め△する文脈のなかで展開されているものであるが、△Aを描き進めていった作者の脳裡には、同時に木本に語りかける『生れ出づる悩み』の△私△が共棲していた△という指摘にみられるように、両作品の本質的等質性への発言は、有島の内面に潜んでいる二面性の顕現としての△天使の眼△と△悪魔の眼△という、△その創作主体において一元的に把握されている複眼の異なる二つの視角△で捉えられた作品としての位置づけを可能にする論として興味深いものである。

氏の、△私△の等質性の指摘は、これら二つの作品を書いた有島が、△われひと共に暗闇に身を滅ぼしてゆく△Aの懊悩を追求した△存在であると同時に、△ともどもに太陽のもとに蘇生しよう△とねがう△私△の讃歌の歌い手でもあった△存在であることをふまえて

たものであることを、みごとに云いあてているのである。

その意味で、これら二つの作品が、△二つの対立的な素材を得て平行してそれぞれ書き進めるといふ事情になったために、二つの△眼▽はあからさまに分極化し、互に補充しあう二つの作品を生み出す結果になった▽というときに、ある意味で、独立性を失ったものとして位置づけられているように受け取られる論としての可能性のあることも事実である。大里恭三郎氏の意見は、そのことを指摘したひとつの論である。^(註5)

もちろん、有島の創作意図を語る言葉、△愛が正当に取扱はれた場合と、不正当に取扱はれた場合とから来る恐ろしい隔たりを見極めてみようとした▽という「石にひしがれた雑草」に関する一文、また、△私は「生れ出づる悩み」に於て凡て、誕生を待つよき魂に對する謙遜な讃歌を唱へようとした。自然は大きな産辱だ。私はその産辱の一隅につつましく坐つて華やかな誕生を祝する歌手でありたい▽という一文、『広告文』大7・10』からも明らかであるように、元来、別種の、独立した作品として意図されたものであり、結果的にも、たしかに、それぞれは△作品としての自律性を欠いてはいない▽ものであろう。それにもかかわらず、あえて、これらの作品を、ひとつの關係のなかで捉えることに意味があるとすれば、それは、現象として描かれている△相對する二つのモチーフ—毒薬と解毒薬のように、日常性を二つの對極に切り裂きつつ深化していった▽を、根本において統一する主体としての作家の内面性そのものが問題になるからなのである。

「芸術を生む胎」〔大6・10〕において有島が説いているように、

有島の芸術論の基本が△愛▽論であることは周知のことであるが、これら二つの作品が、深く人間の愛に関わりをもったものであることを、広告文の自註は表わしているのであるが、まず、そのことが問題になることではないだろうか。

これだけでは、あまりにも、有島の作品論としては一般的にすぎない問題指摘ということになるのかもわからない。

しかし、有島が自らの作品を、著作集というかたちで発表しつつ第六輯に到ったという事実の積極的な意味を問うことによって—それは、非常に意識的な編集意図に支えられた試みであることを述べることによって、明らかにすることにはちがいないと思われるのであるが、そのことを証明するひとつの方法が、著作集に付されたエピグラフ解釈であり、そのことを通して、有島が自らの文字を通して追究しつづけたものが△愛▽であることを、ここにもまた、△愛▽の諸相の側面が描かれていることを知ることができる。

二

有島武郎著作集第六輯『生れ出る悩み』のエピグラフとして掲げられているホイットマン詩は、「炬火」〔The Torch〕で、ホイットマン四十六才の時の作品であり、『草の葉』第五版（一八七二）で定稿となったものである。^(註8)

詩は四行の小品であるが、有島には、ホイットマン詩のなかでもとくに魅力を感じていた作品のなかのひとつであったようで、「散珠—ホイットマンの小詩より」として、大正十年一月、「太陽」に

発表した訳詩十篇のなかに加えられており、後、「ホキットマン詩集」第一輯〔大10・10〕にも収録されている。

わが西方にあたる或る汀の真夜中に、漁夫の一群が見つめながら立つてゐる、

漁夫等の前に拡がる湖のななたには、他の漁夫等がゐるて鮭を突いてゐる、

独木舟、おぼろに影めいた一物、それが黒ずんだ水を横切つて動いてゆく、

燃えさかつた炬火をその舳首にかゝげながら。

〔有島訳「炬火」〕

いま、この「ホキットマン詩集」に収録された有島訳「炬火」を讀むときに、直接的には、「生れ出づる悩み」のためのエピソードであるかの印象が強い。

出漁した漁夫たちが、自分たちの進退を定めるための目当である「模範船」の艦に挙げられた、△長い鉄の火箸に火の起つた炭▽〔五〕火の発する△火の子▽は、ホキットマン詩の△炬火▽のイメーシと重つて鮮かである。と同時に、有島が、その炭火を、

「暁暗を、物々しく立ち騒ぐ風と波との中に、海面低く火花を散らしながら青い焰を放つて、燃え上り燃えかすれるその光は、幾百人の漁夫達の命を勝手に支配する運命の手だ。その光が運命の物凄さを以て海の上に長く尾を引きながら消えて行く。〔同前〕」

有島武郎研究 一 著作集第六輯「生れ出る悩み」をめぐる一

というときに、それは、すでに△炭火▽や、△漁火▽であることを越えて、運命そのものであることを知る事ができるのである。

それは、「迷路」において、Kの棺を前にしたAが、黎明前の闇のなかで、存在すべてのものの△どす黒い空虚▽を思いながら待望していた△光▽であり、同時にまた、人間存在の闇を、△底深い暗黒▽、△どす黒い空虚▽を、△真夜中の闇よりも更に暗い―黎明前の闇▽として認識せしめる△光▽でもある。その光に照らし出された人間の姿は、その故に、向日性をもった存在であると同時に、闇そのものでもあるはずのものである。

有島の人間における闇の認識が、その本質において死の認識であり、その内部には、荒野性ということもできる不毛の愛の実感をも含んだものであることはすでに述べてきたところであるが、「生れ出づる悩み」、「石にひしがれた雑草」の二作品を収録した著作集第六輯のエピソードに、「炬火」が掲げられているということは、この著作集もまた、「迷路」と同様に、人間存在の荒野性を、その内面における荒野の事態を認識した者の、その実感と救済への可能性を憧憬した作品であることを物語っているように思われるのである。

ところで、ホキットマン詩「炬火」の解釈には、いかなる可能性があるのであろうか。

この詩に関する有島の直接の発言はない。しかし、訳出されたときの詩群とそれらの配列は、鈴木鎮平氏の、△単に新詩紹介とは言えない▽ものであり、△静かに死をみつめ、死に向かつてたじろが

ず旅立とうという孤独なホイットマン像を彫塑し、そこに有島自身
のひそかな願いをオーバールップさせようとしたVものであるとい
う指摘にもあるように、それが、たんなる叙景詩ではないことは充
分に考えられることである。その意味で鈴木氏の、

つづく第七番詩「炬火」において、この幽玄な魂は「独木舟」

The canoe に見たてられ、「独木舟、おぼろに影めいた一物、それ
が黒ずんだ水を横切つて動いてゆく、燃えさかした炬火をその船に
かかげながら。」 The canoe, a dim shadowy thing, moves
across the black water, / Bearing a torch a—braze at the
prow. (Mckay I.G.) と歌われ、なおも永遠の回帰の中を旅する
魂のおごかな姿が、幻想的な調子によって印象づけられた。〔3
訳詩「散珠—ホイットマンの小詩より」他と危機脱却〕

という解釈は、この詩の象徴性をよく云いあてたものとして、大変
興味深いものである。

たしかに、ホイットマン詩にあつて、△夜Vは、△魂とか生命と
か死とかいう神秘的なテーマVの気分を醸成するシチュエーション
の重要な要素のひとつなのである。^(註10)

また、△海Vも—この場合、正確には△湖Vであるが、内容的に
はほとんど海のイメージに重ねて用いられていることは、岩波文庫
版の訳で、△わが北西部の海岸でVとなつて^(註11)いることからも明らか
であるし、その神秘性において、△魂の旅する場Vとしての暗示力
に富んだイメージをもっていることに留意しなくてはならないので

ある。

有島にとつては、それらのものが、ホイットマンのいうところの、
可能性の象徴としての△生命の海Vであると同時に、黒い水面であ
るといふところに、人間の闇の認識の象徴表現である否定的状況認
識、またその人間たちのうごめいている場としての意味をも持たせ
ることのできる可能性もあつたはずである。

先に、「有島武郎研究—著作集第五輯『迷路』をめぐる(一)」「^(註13)
」において、「迷路」が、有島の否定的自己認識を△荒野性Vにお
いて捉えている作品であることを述べたが、『生れ出る悩み』もま
た、そのような状況を表現した二つの作品を収録した著作集である
ことを、エピグラフは表わしている—少くともその可能性をもつて
いる—ということができるように思われるのである。以下、それぞ
れの作品について考察をすすめることによって、そのことを明らか
にしてみたいと思う。

三

「石にひしがれた雑草」が、△愛が正当に取扱はれた場合と、不
正当に取扱はれた場合とから来る恐ろしい隔たりを見窮めて見よう
としたV作品であるという有島の意図からも明らかであるように、
この作品の主題は、人間の内面に存在する愛の不毛性のもたらす荒
野の事態の検証にあるということができよう。その意味で、タイト
ルも、荒野の状況を象徴的に表わしているように思われる。

有島が、△愛が正当に取扱はれたV作品として考えているのは、
言うまでもなく「宣言」であるが、これらの作品の間にあるちがひ

は、結末の部分に集約的に表現されている。

心よ。忍んで待て。

黎明の空の端に、二月二十三日の太陽が今昇り始めた。

僕は夫れを見つめて居る。〔宣言〕—AよりBへ〕

Aの、この告白は、いわば、闇から光への可能性に支えられた希望の表現である。それが、ライバルのBの、一切のものをA敢て犠牲にVしてまでも得ようとするY子への愛の誠実さによって支えられているものであり、A裸かなる真実、いつはらざる誠実V〔同前—BよりAへ〕に支えられた新生願望の表明でもあったことはすでに述べたところである。

それに対して、「石にひしがれた雑草」の結末は、

君のなまぬるい神経に僕ら三人の運命の結末が何う映るか。兎に角僕は魂の藻抜けになつたM子を君に与へる。人間が一生の間に恐らくは一度より経験しない尊い深い生命の燃焼を、一片の思ひやりもなく、ふざけ切つた心で弄んだ君が、果して君の恋人を死より救ひ得るか何うか、僕は何処かで楽しみに見てゐるぞ。

というように、A愛を不正当に取扱Vつた張本人である加藤に対するAの、呪いに満ちたA宣言Vであるが、「宣言」の、A、BのA宣言Vにくらべて、その内容が極端に否定的であるのが印象的である。

有島武郎研究 — 著作集第六輯「生れ出る悩み」をめぐる一

一方が、愛の可能性に支えられた新生願望の表明であるのに対して、こちらは、愛の破綻にもとづく破滅凝視とでもいうのであろうか。そこには、A誠実VとかA真実Vという言葉とはおよそ反対の言葉で表わさざるを得ない人間像が予測されるわけであるが、加藤なる存在が、それにふさわしい人間像として、極端に不誠実な、不真実な生きざまを思わせる存在として形象されているのも、どうやらそのためであるように思われるのである。

作品のなかでは、不思議に存在感の稀薄な加藤であるが、先のAの言葉からもわかるように、思いきり否定的に描かれているのが加藤梅治郎なる人物である。

A〔君のやうに〕真剣といふものの解らない人間V、A僕は君を考へ出す度毎に、君がこの世に生れ出て来た訳が判らなく思つた。君といふ人間は用もないのに遇然に創り出された邪魔者だとしか僕には思はれなかつたV、A人の心を軽く秤にかける奴は詛はれるがいいV……とまあ、このような具合である。これに感情的な表現を加えると、A何だつて君のやうな人間が生きてゐるのだV、A〔だから〕君が早く死んで行くのは僕にとつては何よりも合理的な事だつたV、ということになる。

坊主憎ければ……の譬ではあるまいが、学生時代の加藤を思い出して、すでにA君が口尻に現はすゆがみ一人によつては、殊に女性などは、それを愛嬌と見るかも知れない—そのゆがみを僕は極端に厭はずにはゐられなかつたV、と追い打ちをかけている。その加藤がA日曜は教会に行く事を知つてゐたVというのであるから、念の入つたことである。

個人的な好悪はさておいても、Aの加藤評は、その存在それ自体を容認することのできぬほどに否定的であるのは、一言で云うならば、愛の人ではないからである。少くとも、愛の苦惱を自らの存在にかけて共有することのできない存在だからである。

これは、有島文学における否定的人間像として追突してきた者たち―換言すればハカインの未裔Vたち―とはいささか異った存在である。他には類を見ることのできない、血のかよわない悪、人間性を失った悪をその本質とした存在なのである。

これはもう、有島が、たとえば葉子や倉地を悪魔的というものは基本的に異った悪魔の存在を認めなくてはならない状況にあることを物語っているのではないだろうか。

復讐！―復讐！最後まで復讐！この場になって何の未練だ。最後の結果を来らすべき復讐！！悪魔！舉つて今窟くわを出ろ！！

もちろん、△悪魔Vが、直接的にはM子であり、加藤であることはいうまでもないことである。彼らが悪魔と呼ばれてもしかたがない状況でもある。しかし、Aの断末魔の呻き声のなかに呼び出されている△悪魔Vには、強調表現を越えた実感がこめられているように思われる。

何んにも目的がなくなつてしまふと、人間の姿といふものが可なり露骨に見え透くよ。悪魔の眼が冴えているのも多分その為めなのだらう。

悪魔の目的は、人間に自らの存在を否定されるほどに充分に存在することだと云われている。そして、悪魔の存在の本質は、存在それ自体が悪なのであって、換言すれば、目的を持たぬ存在なのである。

いま、Aにとつて、すべてのことが成就しつつあるということ、一方において△復讐の目的はすでに存分に遂げたV(註5)ということでもあるが、Aそのものも、悪魔化してしまったことを―荒野性の極致であるところの―表わしているのではないだろうか。

謎めいた言葉、△豚も海鼠も、さげるまで口を開いて笑Vい、△しかも僕が笑へといば、彼奴等すら笑いかけた口を結んでしまつて、しかもつらしく僕を尻目にかけるに違ひないVという状況は、△復讐といふ女の悪魔Vと契りを結び、自ら悪魔と化したAの魔性の表現であるにちがいない。

*

Aの加藤観が、たんなる強調表現を越えてその本質としての悪魔性を内容とするものであるのに対して、M子観は、多分に寛容な一面をもっている。それも、AのM子に対する愛ゆえのことではあるのだが。

「おゝ俺はM子を愛する。」この愛の正否を誰が冷やかな心で批判する事が出来る。正しからうが正しくあるまいが、価値があらうがあるまいが、悲壯であらうが滑稽であらうが、俺にはM子を愛すると云ふ外にM子に対する感情を云ひ現はす言葉がないのだ。

△あの心の底まで腐れ果てたM子▽とか、△悪魔的に人を誘惑する日本髪の半分腐つたやうな濃厚な匂ひ▽を発散するM子であると悪しざまにM子を罵つてみても、あるいは、また、オットー・ワインゲルの極端な女性蔑視論をもち出して、その婦女性を強調してみても、M子への未練とも思われる信頼は、なかなか失なわれていないのである。

M子だつてニンフではない。心臓は持つてゐる。女だ、人間だ。或る場合には世の中を正しく見る事も出来る筈だ。」

というAにとつて、悪いのは、あくまでも加藤なのである。寝入つてしまつているM子の姿に、△母の膝から下ろされたばかりの童女のやう「な」、可愛らし▽さを見ているのも、Aの内面にあるM子への聖性願望の顕現にちがいない。

しかし、所詮はM子も魔性の存在なのであろう。M子のもつている△黒▽のイメージは、人間の内面にある魔性の表現なのである。

加藤の趣味の反映として、M子が△明治初年頃の束髪にし▽、△それに細い黒のリボンをさしてゐる▽のが象徴的であるように、M子の印象は、一方において聖性を願われながら、実質的には△黒▽なのである。

△不思議に苦さを失はぬ二十九の豊満な肉体は、湧きかへるやうな淫蕩な黒血を、やや青味を帯びるまでに白い滑かな皮膚ではち切れさうに包んでゐた▽M子は、△ダナーを描いたコレジオの女▽で、

有島武郎研究 ―著作集第六輯「生れ出る悩み」をめぐる―

△それはまるで晩春の日光に醗酵しきつた黒牡丹の花▽のような印象だといふのである。

有島の描く女性像にみられる△黒▽のイメージは、「直言」のY子や、「或る女」の葉子の、△黒い火のやうに燃え▽ている、△黒い焰を上げて燃えるやうな▽眼の描写において印象的であつた。それが、やがて、「瞳なき眼」の、△瞳の妄執に黒く焼え立つ小さい瞳▽に収斂するものであることについては、すでに述べたところであるが、M子の△黒血▽にしても、たとえば葉子が見た凶夢のなかで、殺してしまつた男の額から、△どくどく流れた―黒血▽「二十一」がそうであるように、人間の闇の認識につながる否定的存在性の象徴表現のひとつであらう。それは、△「葉子が」祖先から本能的に伝へられた淫乱の血(男子を征服せんとする女の強大なる武器)▽であると同時に、△非人間的悪魔性の心▽「松山京子宛書簡、大8・9・29」の顕現でもあり、また、有島自身の内部に潜んでいる△毒血▽「野口幽香宛書簡、大10・1・4」の謂でもあろう。

有島の、人間存在に対する荒野性の認識は、かくも根深いものだったのである。

四

△私はその産褥の一隅につつましく坐つて華やかな誕生を祝する歌手でありたい▽という有島の思ひは、「カインの末裔」のエピグラフ、「天然に帰る隣問よ」△「アダムの子たち」のうち」の一節、△あゝ君ら世の嫌われ者たちよ、少くともぼくだけは君らを嫌うことはなく、直ちに君らの群のまん中に入りこんで、君等を歌う詩人

となろうVを想起せしめるものである。

一方がAカインの末裔Vであるのに対して、「生れ出づる悩み」の主人公木本は、A誕生を待つよき魂Vの持主であるという違いはある。しかし、彼がA異邦人V「五」としての苦悩を味っている存在だという意味で、本質的には疎外された存在、すなわち本来的な意味での故郷を持たぬカインの末裔のひとりだったのである。

このことは、この作品が肯定的な人間観にもつづいたものであるかの印象をもちながら、かならずしもそうばかりではないという読み方がなされることに関係していることなのである。ともすれば、この作品にみられる否定的側面が、瑕疵であるかのように指摘されていることもあるが、AとA私Vの内面性における等質性を思うときに、それは積極的な意味をもった特色でもあるのである。

構成上の特色からも明らかのように、この作品は本来、有島の分身であるA私Vの内面の告白が主眼なのである。

木本の画業―その生きかた、芸術観に感動し、賛意を表した作品として、一方ではモデル木田金次郎を前面におし出した作品ということもできるが、実は、四章以下は、A私Vが私の想像にまかせて―君の姿を写し出して見V「四」たものであり、そこに語られている木本の内面の苦悩は、A私Vのそれなのである。

もちろん、その素材は木田から提供されたものであり、木本像形象にあたってはほぼ忠実に生かされてはいるが、有島と木田との交渉にみられる事実の差が象徴的であるように、それに意味を与え、作品のなかであるべきところに位置づけているのはA私Vなのであって、A君、君はこんな私の自分勝手な想像を、私が文学者であると

云ふ事から許してくれるだらうかV「七」、とか、A君よ!!この上君の内部生活を忖度したり揣摩したりするのは僕のなし得る所ではないV「九」という言葉がそのことをよく表わしているのである。

あえて云えば、A去年の十月にあのスケッチ帖と真率な手紙とを送つてよこしたV木本のA内部の葛藤の激しさV「同前」を、A私Vの魂の苦悩に共感する苦悩の表現として描き出した作品だということになるのであろう。

「生れ出づる悩み」の木本に託して語られている有島の理想の側面は、すでに諸家によつて指摘されているところであるが、この作品のなかに、たびたび用いられているA涙ぐむVという言葉によつて表わされている心情も、有島が木本を通して表現しようとする、人間としてのあらまほしき姿のひとつではないだろうか。

A涙ぐむVという表現から想い出されるのは、中川一政詩集「見なれざる人」に寄せた有島の評言「『雑信一束』第十一信 大10・4」である。^(註20)

中川一政が、A涙ぐんでから「涙ぐまじきかな」と書くV詩人であることに触れて、A正しく愛することをV教えてくれる詩人であることを賞揚しているのであるが、同じ評語を、木本の書簡に対して、木本の行為に、あるいは木本の自然との対しかたに、さらにはその存在そのものに対して与えているということは、同じ心持ちで生きようとしているA私Vと、根底おいて響きあっている存在であり、肯定的側面だけではなく、否定的側面においても共感しうる存在であることを表現しているところなのである。

ところで、その木本が、△私▽との最初の出会いのときから、△十六七の少年には咄めさうもない重い惘鬱▽〔二〕を感じさせる者であったと描かれているのは、山田昭夫氏の指摘にもあるように、興味深いことである。その印象は、成人してからの木本にも、△何処か病質にさへ見えた惘鬱な少年時代の君の面影は何処にあるのだろう▽〔三〕と一方では否定されながら、実は△暗い心▽〔七〕、△異常な憂愁▽〔八〕というかたちで受けつがれているのである。△私▽自身も、△人生の旅路の淋しき▽〔同前〕を思い、△この己むを得ない人間の運命をしみじみ▽と感じて深い惘鬱に襲はれる▽傾向を持っているのであるが、思うに、この傾向というものは、有島の作品における人物たちの基本的な気質であり、有島自身の自己認識にも深く関っているところなのである。

惘鬱〔melancolie〕、憂愁ともいうこの言葉は、キルケゴールのいう△自己の内奥にひそむ無限なものがほころび出ようとしながらその発動がはばまれて重たい心▽のことであり、△人間の生涯には直接性がいわば成熟して、精神がより高次な存在形式を要求し、そこに自己自身を精神として把握しようとする瞬間がくる。……自己の永遠の価値を精神は自覚しようとする。が、……それが押し戻される時、そこに憂愁があらわれる▽もとして捉えられる実存的認識の謂なのである。つまり、自らの精神状況の不毛性の、換言すれば荒野性の克服の試みに対する、一種の絶望感を招来する認識なのである。

作品において語られている木本の、遭難時の幻覚体験〔六〕や、

有島武郎研究 ― 著作集第六輯「生れ出る悩み」をめぐる ―

自殺志向〔八〕というかたちで語られている内的体験も、その意味で、有島の内的必然性に支えられた、限界状況認識のひとつの表現として位置づけることができるように思われる。

船……船！

濃い吹雪の幕のあなたに、さだかには見えないが、波の背に乗って四十五度位の角度に船首を下に向けながら、帆を一ぱいに開いて、矢よりも早く走って行く一艘の船！〔六〕

△真白い帆▽を張ったその船は、△いつの間にか水から離れ▽、△波頭から三段も上かと思はれる辺を▽、△傾いだまゝ矢よりも早く走って▽行き、やがては△降りしきる雪の中に薄れて行つて▽、△見えなくなつてしまつた▽。

有島は、この場面を、△生死の間にさまよつて、疲れながらも緊張し切つた神経に起る幻覚だつた▽〔同前〕というのである。

あたかも、ロマン派の絵のような、死と難波が、△自然の大叫喚▽〔同前〕とともに、木本の不安定な魂をゆるがせ、おのかせ、震撼せしめている姿が、一種の終末の予兆でもある幽霊船の幻視のなかに描かれているところである。

これこそ、△感傷的憂鬱ではなく、絶対的憂鬱▽というべきもので、△資質ある芸術家だけが眠れぬ夜のなか、底知れぬ憂愁に沈める姿なのである。

*

人間といふものは、生きる為めには、厭でも死の側近くまで行かなければならぬのだ。謂はば捨身になつて、こつちから死に近づいて、死の油断を見ずまして、かつばらひのやうに生の一片をひつたくつて逃げて来なければならぬのだ。〔七〕

木本の、自殺志向は、作品を肯定面の強調の側面だけで読めばいかにも唐突に思われるが、木本の心中に企てている△恐ろしい企図▽〔八〕は、生を願うものが近づかなければならない△死▽へのかぎりない接近であるという意味で、木本の意図は、本質において生への願望なのである。と同時に、△重錘をかけて深い井戸に投げ込まれた燈明のやうに、深みに行く程、「君の心は」光を増しながら、感じを強めながら、最後には死といふその冷たい水の表面に消えてしまはうとしてゐる▽〔同前〕木本の心は、まさに底知れぬ深淵の際に立たされた―△平地から突然下方に折れ曲つた崖の縁が、地球の傷口のやうに底深い口を開けてゐる▽、その△崖の際▽〔同前〕にである―危機状況におかれた存在であることをよく表わしてゐるのである。

これらの状況が、ともに木本の内面の荒野性を語っているものであることはいままでもないことである。そうであればこそ、木本の魂を、

地球の北端―そこでは人の生活が荒くれた自然の威力に厭倒され

て、瘦地におとされた雑草のやうに弱々しく頭を拾げてゐる、人類の活動の中心から見逃される程隔たつた地球の北端の一つの地角
〔九〕

に生きるものとして描かねばならなかつたのである。

その本質において荒野である地球が、闇にとざされた暗黒の水面のごとく、生命を飲み込んでしまう深淵の口をあけている地球が、どうして、△生きてゐる。生きて呼吸してゐる▽〔同前〕ものでありうるのか。どうして、△春が来るのだ▽〔同前〕といひうるのか。それは、有島の祈りだったのである。

君よ、春が来るのだ。冬の後には春が来るのだ。君の上にも確かに、正しく、力強く、永久の春が微笑めよかし……僕はたださう心から祈る。〔同前〕

荒野が、緑の牧場に、そして憩の汀になれよかしという有島の祈りが、このところには描かれてゐるのである。

五

エピグラフに掲げられているホイットマン詩「炬火」が意味するものは、すでに明らかであろう。

△黒ずんだ▽虚無の海にうかぶ△独木舟▽は、黒く燃えさかる焰

を掲げながら、光明の世界を求めてさまよう魂の象徴なのである。そこにごめく漁夫たちは、「死と其の前後」(大6・5)の序幕に、その姿を現わしている(人死Vの使者、人影人Vの趣きがあつて無気味である)。

註

- 1 作品名としては「生れ出づる悩み」と表記されるが、著作集の場合「生れ出る悩み」となっているので、それに従つた。
- 2・7・15 「有島武郎の創作方法(下)―石にひしがれた雑草」から「或る女」へ―「同志社国文学」第十一号 昭51・2
- 3 坂本 浩「解説」『生まれ出づる悩み』角川文庫 昭44・5
- 4 「石にひしがれた雑草」(本多秋五・瀬沼茂樹編)『有島武郎研究』右文書院刊 昭47・11
- 5・6 「石にひしがれた雑草」論―仮面の復讐―(安川定男・上杉省和編)『作品論有島武郎』双文社刊 昭56・6
- 8 酒本雅之「解説」『ホイトマン詩集』草の葉 下 岩波文庫 昭46・7
- 9 「3 訳詩『散珠―ホイトマンの小詩より』他と危機脱却」(『有島武郎におけるホイトマンの相貌』明治書院刊 昭57・6)
- 10 清水春雄「夜のイメジ」(『ホイトマンの心象研究』篠崎書林刊 昭43・11 訂正版)
- 11 註8に掲げたホイトマン詩集「草の葉」の訳による。
- 12 清水春雄「海のイメジ」(註10に同じ)

有島武郎研究 ―著作集第六輯「生れ出る悩み」をめぐって―

- 13 梅光女学院大学「日本文学研究」第一七・一八号 昭56・11、57・11
- 14 ルース・N・アンシェン、金勝 久訳「悪魔の实在―人間の中の悪―」佑学社刊 昭49・10
- 16 イタリヤ後期ルネッサンスの代表的画家の一人。人間らしい微妙な感情の描出をしたといわれている。「ダネー」は晩年の作。
- 17 有島武郎研究―憧憬をめぐって―(梅光女学院大学「日本文学研究」第十号 昭49・11)
- 18 小沢勝美「生れ出づる悩み」(『日本文学』昭41・5)
- 19 その間の事情については山田昭夫氏の「生れ出づる悩み」鑑賞(『鑑賞日本文学』第十巻―有島武郎 角川書店刊 昭58・7)に詳細に述べられている。
- 20 中川一政詩集についての有島の発言に関しては、拙論―「有島武郎研究―詩への逸脱」をめぐって(『梅光女学院大学「日本文学研究」第十一号 昭50・11)において、いささか述べている。
- 21 「生れ出づる悩み」鑑賞(『鑑賞日本文学』第十巻 有島武郎 角川書店刊 昭58・7)
- 22 「憂愁」(『実存主義辞典』東京堂刊 昭39・9)
- 23 坂崎乙郎「ロマン派芸術の世界」(『講談社現代新書』昭51・9)